

# 1980's

15

橋爪大三郎  
社会学者

## ピンボケ空振りのサヨクに 巻き返すチャンスはあるか

この社会を造りかえようというのだから、どうしてもエリート主義になる

八〇年代を通じてパツとよくなったと言え、左翼だ。八〇年代はおろか七〇年代から、とうに左翼は凋落の一途。新左翼・過激派と言わず、戦後知識人、労働組合、共産党、社会党……とにかくサヨクと名のつきそうなものは、ダサイ、クライ、ムサイ」とマイナスイメージの吹き溜まりである。往年のマルクス・ボーイが女性にもっていったのを思えば、隔世の感とはこのことだ。まるきり展望がないのに見切りをつけて、目先の利く連中は



さつさと左翼の陣営から逃亡した。八〇年代左翼は、その出がらしみたいなもの。まだ左翼をやっているなんて、①並外れて鈍感なのか、②既得権にしがみつくよほどの悪か、③要領の悪いとびきりのお人好しか。左翼はとつと消えてなくなれ、だけれども、善良なお人好しを悪しきまにのしるだけじゃ、ちと気の毒。ちゃんと引導を渡さなければ、浮かばれまい。やることをなすこと、左翼がピンぼけ空振り続きの続いたのはなぜなんだ？そこをはっきり

させるには、政治のあり方から押さえていくのがよい。じゃあまず、政治とは何か。私の思うに、**「大勢の人間をいっぺんに拘束してしまふ事柄を決定する」**のが政治の本質である。たとえば、どこに橋を架けるか、誰からいくら税金を取るか、みたいなこと。自分のこと(どこに住もう、何を買おう、……)なら、誰でも自分で勝手に決められる。そういうのは政治と言わない。ひとり決めてられない、複数の人間の行動を束縛することを決め

# 1980's



イラスト・伊藤桂司

るのが、政治だ。そう思って見回してみると、政治はごくありふれていて、家族の中や、ちょっとした集まりにも必ず見つかる。国会で法律を定めたり、予算を決めたりするのも、もちろん政治である。さて、政治には、いろいろスタイルがある。たとえば伝統社会では、長老や王が大事なことを全部決めたりする。そうではなくて、民衆(関係者の全員)が自分たちのことを決めるのを原則にすれば、民主主義だ。ところで左翼だが、彼らは政治に関して、独特のスタイルをもっている。

フランス革命の頃、国民公会で議場の左側に席を占めた人びとを、「左翼」と呼んだ。彼らは革命の機に乗じて、財産の平等化をはかるなど、社会革命を推し進めようとした。以来、連綿と続く左翼の特徴を、次の三点にまとめてよからう――  
①弱者(民衆)の味方になる。  
②現状よりぐんとましな、理想社会の青写真を描く。  
③その理想を実現するため、民衆を指導し、社会を改造する。ブランはなかなか結構だ。うまく行けば、民衆が泣いて喜びそう。

は革命の機に乗じて、財産の平等化をはかるなど、社会革命を推し進めようとした。以来、連綿と続く左翼の特徴を、次の三点にまとめてよからう――  
①弱者(民衆)の味方になる。  
②現状よりぐんとましな、理想社会の青写真を描く。  
③その理想を実現するため、民衆を指導し、社会を改造する。ブランはなかなか結構だ。うまく行けば、民衆が泣いて喜びそう。

とかく説教臭くなる。(もひとつご注意。エリート主義だからと言って、実際にエリートの集団とは限らない。例えば日本のエリートはあらかた自民党に集まってしまい、社会党などは人材不足で、候補者選びも思うにまかせない)

物を作るよりも売れるほうがむずかしい社会。生産(供給)能力過剰の社会である。似たような商品が、店頭にあふれている。そこで商品は、本来の機能と関係ない、細かな差異をもって、消費者の気を引こうとする。消費者のほうでも、商品のデザインや広告の与えるイメージを手がかりにして、ものを買う。こうなると消費は、「労働力の再生産」なんかでなく、独自の論理をもった現実に育ってくる。商品にまつわるイメージは、根拠のない幻想(上部構造)ではなくて、社会を動かす現実になる。

でも先んじている間はよい。時代を読み違えたり、現状のほうに「ぐんとまし」になったりしたら、すぐに行き詰まる。八〇年代の左翼が、まさにそれ。現実には追い越され、みんなが納得する前向きなイメージなんか、ぜんぜん提出できなかった。それもこれも、マルクス主義の硬直した発想にがんじがらめになっている、現実がへしゃげて見えているせいだろう。

マルクス主義は、よくできた包括的な思想である。この世紀あまり、左翼に圧倒的な影響を与えてきた。ことにマルクス経済学を踏まえて、パンチの効

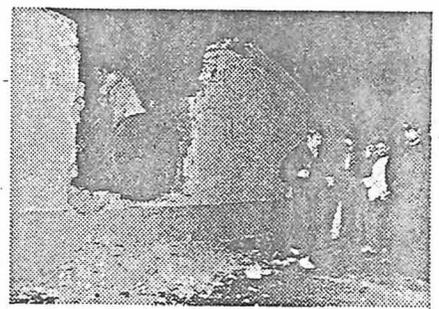
消費社会は、どんな社会か。ひと口で言うなら、それは、

きり捉えることなどできない。いつまでも賃上げ・スト権にこだわった労組や社会党が、ジリ貧になったのも当たり前だ。

こうして、八〇年代を通じて低迷を続けた左翼だが、ここへ来て、風向きも変わりつつある。海の向こうでは、ソ連のペレストロイカ、東欧の民主化が引き金となって、半世紀ぶりの地殻変動＝構造調整のうねりが渦巻いている。ヨーロッパでは共産党が軒並み腰砕けとなり、「人間の顔をした」社会民主主義がコンセンサスを得ようとしている。入れ替わりに、八〇年代をリードした新保守主義の盟友たち——中曽根元首相も、レーガン、サッチャーも、それぞれ落日を眺めている。

八九年は、長期低落傾向をたどっていた、いや、死に体との声すらあった日本社会党が、息を吹き返した年でもある。ほかにめぼしい対抗馬もないからと、半ばやけくそで委員長に選ばれた土井たか子氏だったが、ここへ来てあの異常人気。参議院で保守逆転の余勢をかって、衆議院でも大幅に議席をもち返した。いったいどうい風風の吹

き回しか。思うにこれは、社会党が左翼でがんばれという意味ではなくて、その反対。つまり、左翼を脱皮することへの期待だろう。労働組合もイデオロギーももう結構。これからはもっと現実的になって、自民党じゃできない政治改革に取り組んでおくれ。そういう願望が膨らんでいる。この人気は、社会党の実態とかけ離れている。あわてて「社会主義革命」の看板を下ろしても、組織体質は古くさいし発想も硬直したまんな。ここをどうにかしないと、ブームもすぐにしぼむのは目に見えている。



去年秋のベルリンの壁崩壊によって、ヨーロッパでは共産党が軒並み腰砕けとなった

八〇年代、ずっと私は「社会党消えてなくなれ」論だった。そのほうが、日本の政治のためによい、と考えたからだ。ところが意外にも、枯れ木に花の狂い咲き。そこであっさり「社会党復活」論に宗旨変えた。老舗の看板は大切にしよう。そして中身を大改造、人間も入れ替えて別な政党に作り変えよう。新しい政党をこしらえるより、そのほうが話が早そうだ。

社会はこうあるべしと勝手に決めてこんでいる  
これが左翼の悪い癖

非武装中立とか、原発反対、韓国の政権は認めないとか、社会党が後生大事にしている政策がある。けれども、誰がそんなこと頼んだというんだろう。民衆の希望と関係なく、社会はこうあるべし、みたいに勝手に決めこんでいる。これが左翼の悪い癖。それも、いい考えならまだしも、出来の悪い大学生の答案みたいな政策では、有権者もあきれしてしまう。

よく考えてみると、左翼であることと、民主主義とは矛盾する

る。民主主義なら、どういう政策をとるかは、民衆が討論してから決まるわけだから、最初は白紙だ。ところが左翼は、それを最初から決めてかかる。ずいぶん失礼な話じゃないか。

社会党が本気で政権をめざすなら、これまでの政策はいちおう白紙に戻したい。指導部も上から下まで、全部選挙し直そう。そうやって左翼を脱皮できれば、九〇年代をリードする政党になれないと限らない。

八〇年代左翼の退潮を、どう分析できるだろうか。

ひとつの要因として、コンピュータに注目してみよう。コンピュータはリアル・タイムに大量の情報を処理する。その昔の第一号機は、ばかにかい真空管の塊だったが、以来、着々と改良が重ねられ、桁違いに安価で小さくなった。八〇年代はそれらがOAやワープロとして至るところに普及していく一〇年だった。労働の質はそれにもなって変化し、市場の分権的なコントロールの効率も飛躍的に高まっている。

左翼は、理性で社会をコントロールすることを売り物にして

きた。しかし理性の(結局は人間の)能力にも、官僚組織の能力にも限界がある。コンピュータで武装した競争市場は、計画経済とは比較にならない効率を発揮する。資本主義社会は左翼が考えたよりも、どうやらずっとよくできたメカニズムらしい。分権的なのは欠点でなく、むしろ利点のようである。だから分権的な原理(政治的自由・民主主義と、経済的自由・市場経済の組み合わせ)を、世界中で民衆が選択したのだ。

こうして左翼の退潮は決定的だが、将来巻き返すチャンスはないのだろうか。

九〇年代は、東西対立の終焉した、多角的な調整と模索の時代。そこでは、南北の対立や地球・環境問題が、改めて浮上してくる。これは、競争市場・分権システムの論理で克服していく問題だ。それをうまく、分権システムのなかで代表できる主体がみつからないからである。そこでもう一度、社会主義原理(さきの①②③)が、見直されるかもしれない。いや、必ず見直されるはずだ、とのべておこう。